



## 学ぶ人権 育むこころ

世の中に残るいじめや虐待、部落問題、障がい者・外国人・女性・性的マイノリティの人権に係わる問題。今回の特集では、これらの問題を少しでも解決させるために大切な「学び」にスポットを当てます。

稲

生小学校の4年生の教室。人権についての授業です。この日のテーマは「誰もが安心して自分らしく暮らすために」。人それぞれの違いを認め合うことが大切であることなどを学び合いました。

このような人権教育が市内小・中学校で行われ、子どもたちの心を育てています。

「差別はいけない」とわかっているにもかかわらず、自分では気付かないうちに誰かの人権を侵害してしまっていることがあります。また、「自分は差別していないから」と差別に関心でいることは、差別を放置してしまうことにつながります。差別をなくし、誰もが安心して自分らしく暮らせる社会にするために、私たちは人権について学ぶ必要があります。

過去の人権問題に関する市民意識調査でも、研修会などで学習経験がある人のほうが、人権課題を正しく理解し、問題意識を持っていることが明らかになっています。

人権問題を自らにも関わるものとして捉え、「差別はいけない」「差別を許さない」という意識を高めるためには、学びの機会への参加が大切です。それは大人にとっても同じ。学ぶことが、人権問題解決の糸口になります。

近年、SNSを使った人権侵害や、新型コロナウイルス感染症に関連した偏見や差別など、新たな人権問題も発生してきています。その問題解決のために必要なことは、一人一人が人権問題を知ること。まずは、その第一歩を踏み出しましょう。

# 知ることが踏み出すこと



人権を学ぶことがいかに大切なのか。長年、人権教育に携わってきている<sup>にしげる</sup>西繁さんに、お話を伺いました。

## 新たな人権問題

近年、新たな人権問題が発生しています。新型コロナウイルス感染者やその家族、医療従事者やその家族などへの偏見や差別、また、SNSを使った暴言やいじめなどです。

いずれもこれまでになかった新たな人権問題ですが、その特徴はこれまでの差別と同じように、誤った知識や偏見に基づき、一部の人を忌避したり、排除したりする差別になっています。

つまり、差別の形は新しくても、その中身は社会に根強く存在する偏見や差別意識と同じもので、その解消のためには社会意識を変えていくことが必要なのかもしれません。

## 人権問題の解決に向けて

人権問題を解決するためには、二つの方法が大切だと考えています。一つ目は「知ること」、二つ目は「学ぶこと」です。

「知ること」は、事実に基づいた正しい知識を得ることです。さまざまな情報があふれている現代社会の中で、誤った情報や、うわさや風聞を鵜呑みにすることが偏見につながっていきます。「世間で常識とされていることは、本当は非常識なことなのかもしれない」と、正しい情報を得るために、また、自分の意識は間違っていないのか、一度立ち止まって考えることが大切だと思います。

また、「学ぶこと」は人権について考えることです。大人が学ぶ機会が日常的に少ないということもあるでしょうが、機会はいくらでも作ることができます。まさに、この広報が学びの提供ですし、毎年人権週間前後に行われる市のイベントなども貴重な学びの場となっています。少し踏み出してみると、身近なところに、たくさん学ぶ機会があります。

## 家庭で学ぶ機会を

さらに、人権を学ぶ機会は、意外にも身近なところにあります。それは、家族や職場と一緒に話し合うことです。例えば、家族で言えば、子どもが学校で人権の授業があった日、その話題で会話する。テレビで人権問題が取り上げられていたら、それについて会話する。そんな家族同士で話すことも、実は人権を学ぶことになるのです。

市内の子どもたちは、自分の経験や人権教育で学んだことを、毎年人権作文を書くことで、人権意識を高め合っています。私たち大人も一歩を踏み出して、人権問題を一人一人が自分にとって身近な問題として考えることが何より大切なことです。ぜひ、家族で、会社で、サークルで、この広報に掲載されている子どもたちの人権作文を取り上げて、一度話し合ってみてください。



西繁さん(鈴鹿市人権教育アドバイザー)

市内の各所で人権講座なども行っています。希望される方は、人権教育センターへご連絡ください。

人権教育センター(☎384-7411 ☎384-7412)



## みんなが暮らしやすい世の中へ

稲生小学校6年 松橋 由依さん

私の妹は、生まれつき耳が聞こえにくくて中度の難聴障がいがあります。母は、先生にそう言われて不安で泣いてしまったと言っていました。私も、もし母と同じように自分の子どもが難聴障がいだと言われたら、不安で泣いてしまうと思います。でも、今の母を見ると、母が不安で泣いていたなんてことが信じられません。それは、毎日笑顔で元気に過ごしているからです。私なら、笑顔で過ごすことなんてできないと思います。母は、強くてすごいと私は思いました。

今は、そんな強い母でも、妹の耳が聞こえにくいこと、補聴器をつけて生活していくことを受け入れられずに、周りの人にはずっと言えずにかくしてきた時もあったと言っていました。でも、ろう学校に親子で通い出して、先生や他の難聴の子

どもがいるお母さんたちと出会ってから、かくしたいと思っていた気持ちが少しずつなくなっていったようです。母は、周囲のお母さんと話して救われたんだと思います。

今は、母も妹も自分から聴覚障がいがあるということいろいろな人に話しています。そうやって、いろいろな人に話せるのは、周りの人が理解してくれているからだだと思います。このように、妹のことを知ってもらって理解をしてもらえると、何か困ったことがあった時手助けしてもらえたりするので、自分から話すことはいいことだと思います。

難聴というのは外見ではわかりづらい障がいなので、どのように伝えたらいいのだろうと母はよく言っています。補聴器を付けるとすべての音声が聞こえるわけではないようです。聞こえ方はその人にしか分からないので、その人に合った手助けを考えて、そして実行してい

# 子どもたちの人権作文

学校で人権について学んだ児童・生徒の皆さん。自らの経験をもとに記した「人権に関する作文」について、代表作品をご紹介します。



## みんながみんならしく生きるためには

天栄中学校1年 眞弓 拓豊さん

今年の夏はパラリンピックとオリンピックが開催された。ぼくはパラリンピックで障がいのある人たちがスポーツの第一線で活躍しているところをみて、いつも感動を覚える。

ぼくは、小学校5年生のとき、半月板損傷をしてしまい、松葉杖をついていた。使い慣れない松葉杖をついてショッピングモールへ行ったことがあった。人ごみの中、松葉杖で歩いていると、ちょうど同世代の人から、痛いほどの好奇の目線を感じ、すごいやな気持ちになった。

でも、今までの僕は、「障がいのある人を好奇の目で見ていたりしなかったか?」「自分にはそんな意識がなかったとしても障がいのある人を傷つけるようなこと

を本当にしていないだろうか?」ずっと自問自答をくり返していた。

ぼくの祖母は介護施設で働く看護師さんだ。そんな祖母に連れられ、数年前に得意だったマジックを披露しに行くこととなった。はじめて祖母の職場を見た。その介護施設では様々な障がいのある人がたくさんいた。右手のないおじいさん、認知症のおばあさん、車いすに乗っている方々……。

そんな方々に対し、祖母をはじめ看護師さんや介護士さんは分けへだてなく優しく、そして楽しそうに伊勢弁でしゃべりかけていた。だからなのか、介護施設の中にいるみんなの声が元気で輝かしい笑顔をしているように見えた。

そんな中、ぼくはマジックを披露した。ハプニングもなく、無事に終わったとき、入所されている方々からたくさんの拍手をもらった。



なければならぬと思います。

今は、コロナのえいきょうもあって、マスクやフェイスシールドをつけているので、声がこもってより聞こえにくくなって何と言っているのか分からないと言っていました。大きな声でゆっくりはっきり話したり、身ぶり手ぶりを使ったり、紙に書いてあげたりして伝え方を工夫してあげてほしいと思います。

最近、私は、母と妹が使っている手話を覚えようとも思いました。それが、私ができる第一歩だと思ったからです。みんなにも、障がいを理解しようとするような、みんなが暮らしやすい世の中にするための第一歩を踏み出してほしいです。



まつはし ゆい  
松橋 由依さん



まゆみ たくと  
眞弓 拓豊さん



たけぐち くるみさん  
竹口 くるみさん

ある方が「言いたいことがある」と言って、祖母といっしょにその方のもとに案内された。

その方はおじいさんで、片手がなく寝たきりの状態だった。その方は僕のマジックをすごく喜んでくださり、「久しぶりにここまで楽しくて、感動した。」と僕の祖母にも元気にしゃべりかけ、何度も「良かった。良かった。」と言っていた。そして最後にその方とあく手をした。

その時、ぼくはすごくおどろいてしまった。理由は、すごく強く、エネルギー溢れるようなあく手をしてくれたからだ。おじいさんは、少しいたずらっぽい笑顔を浮かべながら握手をしてくれた。このときぼくは「みんなのやさしさで一人一人が自分らしく、そして力いっぱい生きることができているのだな」と心からそう思った。

## おにごっこにさそってくれた友だち

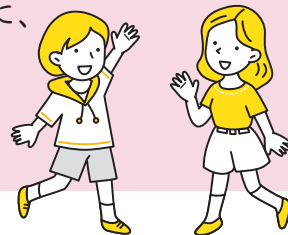
玉垣小学校3年 竹口 くるみさん

わたしは、一人でいるときが一番すきで、毎日昼休みに一人で本を読んでいた。

六月の昼休みに本を読もうとすると同じクラスのAちゃんが「いっしょにおにごっこをしよう。」とさそってくれました。私はさそってくれてうれしい気持ちになり、「いいよ。」と答えました。ほかの友だちもいっしょにおにごっこをしました。外はとてもあつかったので、たくさんあせをかきました。いっしょに走っていたAちゃんも、あせをたくさんかいていました。いっぱいおにごっこにかまってしまいました。おにごっこが終わり、わたしは、「おにごっこにさそってもらえてうれしかったな。友だちを遊ばせにさそえるAちゃんはすごいな。」と思いました。

わたしは一人でいる時間がすきだったのが、この日をきっかけに友だちと遊んでいる時間もすきになりました。また友だちと走りたいと思いました。そしてこれからは、Aちゃんのまねをしてたくさんの友だちをさそって、たくさん外で遊びたいです。

そして三年生が終わるまでに、Aちゃんを遊ばせにさそいたいです。



このことを通し、ぼくはこれからの社会が目指す豊かな社会とは「やさしさのあふれる社会」のことだと思った。みんなが自分らしく、みんなが力いっぱい生きることをできるようにするには相手を一人一人尊重し、気づかう優しさと行動が必要だと思う。

同時に、目に見えない障がいのある人もこの世界にはたくさんいる。

障がいの有無や見える見えないに関わらず、好奇の目でみられるとすごくいやな気持ちになると思う。「何か困っていることはないか、何か助けあげられることがないかな」と自然とそう思えるようになる心をもつことが大切だと自分自身の二つの経験を通して思った。ぼくは、すべての人たちと楽しく笑い合える豊かな社会の一員としてできる行動を考えていきたい。

今回の特集に関するご意見・ご感想は

教育支援課 ☎ 382-9055 📠 382-9053 ✉ kyoikushien@city.suzuka.lg.jp